いのちと生き方③「ごんぎつね」を語る（3）

言葉の響き…オノマトペを楽しもう

情景描写に関わる言葉に注目…オノマトペ

「ごんぎつね」には、視覚表現と聴覚表現を組み合わせ、さらに文体に現在形と過去形を交えることで、生き生きとした情景描写が随所にみられます。この物語にはオノマトペが多用されています。オノマトペとは、擬声語（ものの音や声をまねた言葉）と、擬態語（様子や気持ちを表わした言葉）とを一つの名称にして呼んだ言葉です。一般的に擬音語は「カタカナ」で表記し、擬態語は「ひらがな」で表記します。

声（音）なのか、様子・気持ちなのかが判然と区別しにくいものもあります。光村出版の教科書では「もずの声がキンキンひびく」（カタカナ）とあり、教育出版の教科書では「もずの声がきんきんひびく」（ひらかな）と表記してあります。オノマトペを使うことにより、臨場感やリズム感ある文体となって、場面の様子や人物の姿や気持ちが浮かんで伝わるようになります。

●擬声語の例

◇どの魚も、ドボンと音をたてながら

◇うなぎは、キュッといって、ごんの首にまきつきました。

◇カーン、カーン（鐘）。チンチロリン（松虫）。ポンポンポン（木魚）

●擬態語の例

◇ごんは、ほっとしてあなから…　◇うなぎがぬるぬるすべる　◇水がどっとましていました。　◇加助がひょいと後ろを見る
◇そこからじっとのぞいて…　◇ごんはびくっとし　◇ちょいと、いたずらをしたく…　◇そのままさっさと歩きました　◇くりをどっさり拾って
◇そう列が、ちらちら見えました。　◇ごんはばたりとたおれました　◇ぴかぴか光るいわし　◇火なわじゅうをばたりと取り落とす
◇ごんはほっとして、うなぎの頭を　◇かみくだき、やっと外して　◇ぶらぶら遊びに出かけ　◇道のかた側にかくれて、じっとして
◇話し声はだんだん近くなる　◇ごみが、ごちゃごちゃ入って　◇ぽんぽん投げこみました　◇何かぐずぐずにえています

オノマトペは抑揚をつけすぎてオーバーに表現すると、変に浮き立ってしまう場合があります。だからといって、流してしまうとオノマトペの表現性が生かされてきません。場面に応じて、読むことが必要です。「カーン、カーン」（鐘）、「ポンポンポン」（木魚）はリズムよく、歯切れよく読むとよいでしょう。「ごんはびくっとして立ち止まり、さっさと歩く」の「びくっ」や「さっさ」もやや目立つように読むみたいです。「空はからっと晴れて、もずの声がキンキンひびいて」の「からっ」や「キンキン」は、明るく伸びのある声で読むのに対し、「そっと物置にかくれる」の「そっと」も、低く、柔らかい声を出して読みます。場面を想起して色々音を試しながら読むのも楽しいですね。

このように情景描写に関わる部分に注視することで、イメージがふくらんで明確になってきます。「場面の様子や登場人物の性格、気持ちを想像して読み取る」という学習目標の手がかりとなります。

ある秋のことでした。二、三日雨がふり続いたその間、ごんは、外へも出られなくて、あなの中にしゃがんでいました。
雨が上がると、ほっとしてあなからはい出ました。空はからっと晴れていて、もずの声がキンキンひびいていました。 ごんは、村の小川のつつみまで出てきました。辺りのすすきのほには、まだ雨のしずくが光っていました。川には、いつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水がどっとましていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきやはぎのかぶが、黄色くにごった水に横だおしになって、もまれています。ごんは、川下の方へとぬかるみ道を歩いていきました。 ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうっと草の深い所へ歩きよって、そこからじっとのぞいてみました。

挿絵の活用

光村の教科書では、「かすや昌宏」の光彩画を採用しています。宮沢賢治の『やまなし』（６年）も同様です。かすや氏の光彩画は、和紙や洋紙を形取り彩色して幾重にも重ね、ライトの光で透過させて撮影する独特の技法を用いています。光と影、彩りを通して、透明感や臨場感など場面の空気（情景や様子、心情）が伝わってきます。光村は、「ごんぎつね」や「やまなし」において、場面を想像しながら読み取るには、光彩画の活用がより効果的と考えたのでしょう。文と挿絵を対応させながら、さらに深く「ごんぎつね」の世界に入っていくことができます。では、言葉や文、挿絵をどのように取り上げ、学習活動に活かしていけばいいのでしょうか。具体的な手法の例を以下に述べていきます。

まず、前時の学習　場面１の前半「ごんはひとりぼっちのいたずら好きの小ぎつね」であることを本時でも再確認し、上記の本文波線部分に注目させます。次に、穴でしゃがむごんの挿絵に「吹き出し」が「挿絵の横か下に書き入れるスペース（罫線）」を作ったワークシートに、ごんの気持ちを書き入れさせます。子ども達の発表に沿って、挿絵の細かい部分（ごんの表情や姿勢）や本文の波線部分を取り上げます。できれば、気持ちを推察した根拠（本文のどこの部分、挿絵のどういう点）を子どもが言えれば理想です。出ない時は、まず教師のほうで、「ここの所やね」とおさえます。例示をもとに、次からはできる範囲で自分で根拠を示せるようになればいいですね。右の挿絵では、さらにオノマトペにも注目し、情景をイメージするのもいいと思います。暗い穴とからっと晴れた空の様子、「そうっと」（そっとではない）や「じっと」から、ごんの心中を察してみるのもおもしろいです。意見交流を通して、ものの見方やイメージ化（想像）に広まりや深まりが生まれます。